

# 十二月八日

## 一、はじめに

十二月になると、読み返したくなる小説の一つとして、イギリスの小説家チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』(1843年、以下、『キャロル』として言及)が挙げられるだろう。守銭奴のスクルージが、クリスマス・イヴの夜に、三人の幽霊に見せられた映像をきっかけに、改心する物語である。

こう言ってしまうと、超自然的な幽霊の力を借り、設定をクリスマスにしたファンタジー、の一言で片付けられてしまうかもしれない。しかし、執筆から百五十年以上もの間、世界中で愛読され、また、何度も映画化されたり、明らかにこれを下敷きにした『素晴らしき哉、人生!』(フランク・キャブラ監督、1946年)や、パロディー化した『3人のゴースト』(1988年)まで制作されたりしているのだから、この小説には、クリスマスを題材にした数あるファンタジーの中でも、時代を超えて、人を惹きつける何かがあるのだろう。

その「何か」を解明する手がかりになれば、と願い、作者のディケンズや当時のイギリスについて、また、『キャロル』の背景などについて、述べて行きたいと思う。

## 二、ディケンズの略歴

ディケンズは、1812年に、イングランド南部の港町ポーツマスに生まれ、十歳の時に下級官吏の父親に伴って、ロンドンへ移住する。その二年後、父親が債務者牢獄に投獄されたため、彼は学校を辞め、靴墨工場で働かざるを得なくなる。なお、債務者牢獄とは、当時、借金を払えないでいると投獄された牢獄のことである。

ディケンズは、両親への不信感を募らせ、教育を受けられないことに、屈辱感を覚える。また、工場への行き帰りに都会の貧民の様子が、彼の社会意識を目覚めさせ、後に、『オリヴァー・トウィスト』(1837年)など、社会小説的側面のある作品に生かされることになる。

彼はその後、国会記者をしながら、文芸雑誌に短篇小説を載せるようになり、二十代半ばで『ピクウィック・クラブ』(1836-7年)や『オリヴァー・トウィスト』を出版し、人気作家としての地位を確立する。彼は、文芸雑誌の編集にも強い意欲を示し、自作の小説を掲載するだけでなく、新人作家の発掘も行った。

彼は演劇にも強い関心を持ち、一時は本気で俳優を志したほどだった。俳優になる夢は断念したものの、芝居がかった演出で、自作の公開朗読を行っては、かなりの好評を得ていた。テレビも映画もない当時、小説は、家庭や公の場で朗読されることを通して、親しまれることが多かったのである。

彼は、二度アメリカに講演旅行に出掛け、著作権の国際化や、奴隷制度廃止を訴え、同時に、各地で公開朗読会を行った。もっとも、この時の過労が、その死期を早めたと言われている。

### 三、十九世紀のイギリス

ディケンズが生きた十九世紀、イギリスは、大英帝国として大きく発展したが、その一方で、資本主義の悪い面が表面化し、貧富の差が拡大した。特に、『キャロル』が描かれた1840年代の労働者階級の生活は、イギリス史上、他に類を見ないほど悲惨なもので、「空腹の四十年代」と呼ばれている。

文学史的に言えば、そんな社会状況を反映し、貧民救済を訴えるプロパガンダ的な意図を持つ小説が多く描かれ、また、十八世紀に誕生した小説が、庶民の求めやすい分冊で出版されたり、文芸雑誌が多く出まわるようになったことを通じて、庶民の娯楽として定着するようにもなった。なお、分冊で出版というのは、一作丸ごとではなく、数章ずつばら売りされる出版方法である。

ちょうどその頃、ディケンズは、小説家として、雑誌の編集長として、また、公開朗読を通して、社会改革家的な側面を持ち合わせながら、小説の普及、ひいては、人々に娯楽の種を提供するのに、大きく貢献したのである。

### 四、クリスマス

クリスマスになると、ディケンズは、クリスマスにまつわる物語を書いたり、雑誌の特集号を組むなどして、いつにも増して精力的に、人々に娯楽の種を提供した。

なお、イギリスには古くから、クリスマスに怪談をする習慣がある。クリスマスに怪談なんて、奇異に感じられるかもしれないが、暖かい部屋でご馳走を食べながら、身も凍るような話に耳を傾けるのを、イギリス人は、この上なく楽しいことだと考えているようだ。

ゆえに、『キャロル』を始め、クリスマスにまつわる物語には、しばしば幽霊が登場し、クリスマス特集号に掲載されたのは、ホラーとコミックが入り混じった幽霊話が多かった。

ディケンズが1870年に亡くなった時、ある子供が、「ディケンズさんが死んだら、もう、クリスマスは来ないの?」と、母親に尋ねたという話が残っている。この逸話は、クリスマスの楽しみとディケンズが、いかに切り離せないものだったかを、雄弁に語っていると言えるだろう。

## 十二月十日分

### 五、クリスマス・キャロル

前回、述べたように、チャールズ・ディケンズの『クリスマス・キャロル』(以下、『キャロル』として言及)は、1843年の出版以来、今日に至るまで、世界中で愛好されている。

なお、ディケンズの本家本元のイギリス、ロンドンでは、毎年十二月の半ばになると、ディケンズ本人や『キャロル』の登場人物に扮した人々が、ディケンズの家(現在は博物

館)から、聖ジョージ教会まで、パレードを行い、クリスマス・ムードを高める。パレードの後、聖ジョージ教会では、ディケンズに扮した人によって、『キャロル』が朗読される。

## 六、執筆の背景

ディケンズが『キャロル』を描いたのは三十代の始めで、小説家として、やや行き詰まりを感じていた頃だった。が、それよりも何よりも、彼を悩ませていたのは、親戚一同が寄食したり、子供が生まれたり、出費がかさんでいたことだった。

まとまったお金を必要とした彼は、七年前に執筆した短篇「鬼にさらわれた墓掘り男の話」(以下、「墓掘り男」として言及)を下敷きにして、クリスマス用の「売れる」作品を描くことにした。執筆は急ピッチで進められ、クリスマスの数日前に、何とか彼は出版に漕ぎつけることができた。

## 七、墓掘り男

「墓掘り男」は、人間嫌いでケチな墓掘りゲイブリエル・グラップが、クリスマス・イヴの夜、鬼に超自然的な映像を見せられ、改心する物語で、『ピクウィック・クラブ』二十九章に、クリスマス・パーティーの席で披露された話として挿入されている。クリスマスに怪談をする習慣があることは、既に指摘した通りだ。なお、『ピクウィック・クラブ』については、北川悌二氏による和訳が、ちくま文庫にある。

## 八、当時の評判

『キャロル』は、ディケンズが期待しただけの収入を、残念ながら、もたらしはしなかったが、たいへんな反響を呼んだ。

例えば、ディケンズのライバルの小説家、W・M・サッカレーに、「こんな小説が描けるのなら、全財産投げ打ってもおしくない」、「この小説に対する反対意見に、耳を傾けることなどできない。この小説は、私にとっては国家的な利益、これを読んだ男女にとっては、個人的親切行為になると思われるからだ」と、言わしめるほどだった。

## 九、メッセージ性

ストーリーはよく似ているのだが、「墓掘り男」が、ヒネクレ者を笑い飛ばす滑稽な(だけの)物語であるのに対して、『キャロル』には、社会的なメッセージ性がある。しかも、決して説教臭くなく、身近な事柄を取り上げながら、クリスマスの祝祭気分を、巧みに盛り上げてもいる。

このあたりに、この二作の間のディケンズの小説家としての成長の跡や、金銭的な理由第一で執筆したとはいえ、『キャロル』に対する彼の思い入れが、感じられる。その原稿は訂正の後で黒々としているというし、彼は執筆しながら泣き笑い、夜中に構想を練りながら、一人で外を何マイルも歩いたという。

## 十、スクルージ と「自由放任政策」

『キャロル』の始めに、主人公のスクルージが、寄付を断る場面がある。彼の言い分は、政府運営の貧民救済施設があるわけだし、自分は税金を払うことによって、その運営を手伝っているのだから、更に寄付などする必要はない、というところである。

寄付を集めている紳士は、政府運営の施設の悲惨な状況を示唆し、「そんなところへ行くくらいなら死んだ方がましだと思っている連中も大勢あります」と食い下がるのだが、スクルージは、「死にたい奴らは死なせたらいいさ。そうして余計な人口を減らすんだな」と相手にしない。もっとも、彼のこの言葉は、後で「現在のクリスマスの幽霊」にそっくりそのまま引用され、彼を心から恥じ入らせることになる。なお、和訳は、村岡花子氏の『クリスマス・カール』（新潮文庫）を参考にさせていただいた。

このようなスクルージの態度は、当時の政府のそれと同一視される。つまり、スクルージが「死にたい奴らは死なせたらいいさ」と言ったように、政府は、「自由放任政策」と銘打って、貧民が生きようが死のうが、それは個人の自由という態度を取り、救済施設を一応創りはするものの、実際には、何ら具体的な救済策を施そうとはしなかったのだ。

## 十一、子供時代の記憶

要するに、守銭奴のスクルージを通じて、政府を批判しつつ、ディケンズが主張しているのは、貧しい者や弱い者に、愛の手を差し伸べるのは、富める者、強い者の義務であるということである。

しかし、それとクリスマスに、何の関係があるのだろうか。

ディケンズにとって、クリスマスは、日頃あくせくと忙しい大人たちが、子供と共に祝祭楽しみを楽しみ、子供の頃の気持ちを取り戻す日だった。「時に子供に戻るのは、いいものだよ。特に、クリスマスはね。だって、イエス・キリストも、この日には子供だったのだから」と、彼は述べている。

スクルージは「過去のクリスマスの幽霊」に伴われて、子供時代の自分自身を見て、現在の自分から見れば些細なことが、当時どんなに楽しかったか、他人のちょっとした気遣いがどんなに嬉しかったかを思い出す。金儲けに没頭するあまり、忘れていた子供時代の記憶が、彼が改心する最初のきっかけになる。

『キャロル』が、執筆当時の社会状況を反映し、宗教的な行事を背景に、教化を目的としていながら、時や場所を越えて、誰もが共感できるのは、他人を思いやり、愛の手を差し伸べる気持ちの源として、ある特定の理念などではなく、誰もが持っているはずの子供時代の記憶を挙げている点にあると言えるだろう。